

報 告

食物アレルギー症状が見過ごされていた
重症心身障害児の1例

南部 光彦, 太田 茂

〔論文要旨〕

重症心身障害を有する10歳男児が、初めてカレイを摂取した時に皮膚の発赤と呼吸困難をきたし、食物アレルギーが疑われた。血液検査にてカレイ以外にも多くの食物に対するIgEが高値を示した。卵白や大豆のIgEも陽性であり、以前経腸栄養剤注入時に時々みられた嘔吐や不機嫌、冷汗などが、食物アレルギーの症状であった可能性がある。重症心身障害児では、かゆくても「かゆい」と言えないし、また、かゆくても搔けないために、食物アレルギー症状としての皮膚症状が出現しにくい可能性があり、注意が必要である。

Key words: 重症心身障害児, 食物アレルギー

I. はじめに

食物アレルギーは、皮膚の発赤やかゆみによって、保護者に気付かれることが多い。今回、重症心身障害児で、10歳時に食物アレルギーと診断された症例を経験した。それまでも食物アレルギーが出現していた可能性があったが、消化器症状や精神症状が主体であり、皮膚症状が目立たなかった。重症の心身障害児ではかゆみを直接訴えることができず、また皮膚を搔くこともできないため、発赤も出現しにくい可能性がある。重症心身障害児では食物アレルギーに気付かれにくいいため、保育・養護に関わるすべての職種の者に対して注意を喚起するうえに貴重な症例と考えられるため、ここに報告する。

II. 症 例

症 例: 男児。

基礎疾患: 難治てんかん、重度精神運動発達遅延。

家族歴: 兄にアレルギー性鼻炎。

患児の背景: 在胎39週、2,770gで出生した。頭位自然分娩、アプガールスコアは1分7点、5分9点であった。出生当日からチアノーゼを伴うけいれんが頻発したため当院を紹介され入院した。けいれんのコントロールは不良であり、難治てんかん、重度の発達遅延を伴うようになった。これまで、けいれんのコントロールや肺炎のために26回入院した。

III. 栄養経過 (主にカルテの記載に基づく)

生後5日: 経口摂取不良のため、経鼻経管栄養にて粉ミルクを注入した。

生後4か月: 離乳食を開始した。かゆ、野菜、芋、卵、ヨーグルトを摂取した。

1歳3か月: 離乳食3回/日、粉ミルクでは栄養不足と判断され、経腸栄養剤エンシユア・リキッド[®]を開始した。

1歳5か月: ベビーフード、バナナ、もも、野菜、うどん、パン、豆腐、牛乳、卵、プリン、

Food Allergy Overlooked in a Severely Retarded Child

Mitsuhiko NAMBU, Shigeru OHTA

天理よろづ相談所病院 (小児科)

別刷請求先: 南部光彦 天理よろづ相談所病院小児科 〒632-8552 奈良県天理市三島町200

Tel: 0743-63-5611 Fax: 0743-62-5576

[1845]

受付 06. 8. 9

採用 06. 9. 25

鶏肉, タラ, コーンスープなどを摂取した。

2歳：経口摂取は進まず, エンシュア・リキッド[®]が中心になった。プリンやヨーグルトの摂取は可能であった。

3歳11か月：下痢が続くため大豆乳にしたところ, 下痢が軽快した。またこの頃から経腸栄養剤ハーモニックM[®]に変更した。

4歳0か月：麻痺性イレウスのため入院した(11回目の入院)。冷汗, 皮膚色蒼白, 意識混濁がみられた。また腹部X線で大量の腸管ガスが認められた。入院翌日ハーモニックM[®]を再開したところ再び腹満が出現した。入院3日目, エンシュア・リキッド[®]注入に問題なかったが, 入院5日目, エンシュア・リキッド[®]注入中に口唇蒼白, 冷汗出現し, 呼吸が浅くなった。しかしその数時間後のエンシュア・リキッド[®]注入時には問題なかった。ハーモニックM[®]の注入も問題なく, 以後ハーモニックM[®]を使用した。

4歳8か月：腹満があったため, ハーモニックM[®]からエンシュア・リキッド[®]に変更した。数日後食事(ベビーフード?)をしていて「むせた」。その後「ろう人形のように」顔色不良になった。嘔吐した後, 改善した。母親は「のどに食べ物詰まった?」と考えた。その後もハーモニックM[®]とエンシュア・リキッド[®]を併用した。

5歳2か月：食事(ベビーフード?)をしたら顔色不良, 機嫌が悪くなった。チアノーゼもみられた。

7歳：エンシュア・リキッド[®]やハーモニックM[®]の注入で, 時に嘔吐や不機嫌, 興奮が出現したが, そのような症状は持続しなかった。

8歳：経腸成分栄養剤エレンタール[®]を併用した。

9歳：経腸栄養剤エンテルド[®]を開始したが, エレンタール[®]に混合して注入すると泣くため, エンテルド[®]を中止した。

9歳5か月：他病院にて胃瘻造設, 噴門形成術を施行された。エレンタール[®]+ハーモニックM[®]を持続注入していた。

10歳6か月：カレイを初めて食べたところ, 全身に発赤が出現し呼吸困難も伴った。

IV. 検査結果

10歳8か月時, カレイ以外の魚の摂取を試みる際の参考にするために血液検査が施行された。血清総IgE値は1,515 IU/ml, 多くの食物抗原に対するIgEが陽性であった(表)。これまでサバそのものは食べたことがなかった。タラと鶏肉は1歳頃食べていたが, それ以降は食べなかった。豚肉やイチゴも食べさせた記憶がない。

なお, 6歳4か月時, 咳嗽, 喘鳴を繰り返したため, 血液検査が施行されていた。総IgE値は613 IU/ml, 特異IgE抗体値(クラス)では, ハウスダスト(2), ダニ(1), その他の吸入抗原は(0)であった。食物抗原IgEは測定されなかった。また末梢血好酸球は8歳時に最高27%(好酸球数1,755/ μ l)を示していた。

V. 考察

患児は重度の精神運動発達遅延があり, けいれんや肺炎で頻回に入院した。10歳時にカレイを食べて全身の皮膚の発赤と呼吸困難が出現し, 初めて食物アレルギーと診断された。血液検査でカレイ以外にも多くの食物に対するIgEが陽性であった。タラは1歳頃に食べたことがあった。また時に食べていたベビーフードなどのダシには, イワシやサバが使われていた可能性がある。カレイとの交差抗原性を有する食物により, カレイに対する感作が徐々に進んでい

表 10歳時における食物・吸入アレルゲンに対する特異IgE抗体値(クラス)

食物アレルゲン	
6	: 卵白, 小麦, タラ, アジ
5	: カレイ, サケ, サバ
4	: 大麦, 鶏肉
3	: トウモロコシ
2	: 大豆, 豚肉, イチゴ
1	: 牛肉, リンゴ, バナナ
0	: ミルク
吸入アレルゲン	
3	: ハウスダスト
1	: ダニ, ヒノキ
0	: スギ, カモガヤ, ブタクサ

た可能性がある^{1)~4)}。その他にも2歳頃からは食べさせた記憶がない鶏肉や豚肉、イチゴに対するIgEも陽性であった。何かに混入して摂取したアレルゲンに対し、IgEを産生してきた可能性がある。一方、新生児期から粉ミルクを摂取、離乳食ではヨーグルトも摂取していた。牛乳の他に、カゼインや乳清蛋白が含まれているエンシュア・リキッド[®]やハーモニックM[®]も投与されてきたが、ミルクIgEは陰性であった。

10歳時に食物アレルギーとしての明らかな皮膚症状が出現したが、血液検査結果で卵白や大豆に対するIgEが陽性であったことから逆に考えると、それ以前にも食物アレルギー症状が出現していた可能性がある。6歳時の血液検査でハウスダストIgEは弱陽性であったにもかかわらず総IgEは高値を示しており、食物に対するIgEを測定していれば陽性であったかもしれない。経腸栄養剤注入時に、何度か冷汗や不機嫌が出現していた。エンシュア・リキッド[®]やハーモニックM[®]にはカゼインや乳清蛋白以外に大豆蛋白が含まれている。エンテルード[®]には卵白が含まれている。また食物摂取時にも症状が出現していたが、むせたり、のどに詰まらせたりしていたのではなく、食物（ベビーフードであったかどうか、詳細は不明であるが）に含まれた成分に対する食物アレルギー反応としての症状であった可能性がある。しかし非特異的な症状が中心であり、皮膚の発赤や膨疹には気付かれなかった。重症の心身障害があり、かゆくても「かゆい」と言えない、また、かゆくても掻けないために、食物アレルギー症状としての皮膚症状が現れにくかった可能性がある。

卵や魚介類ではIgEが高値の場合に食物負荷でアレルギー症状が現れやすいと言われている⁵⁾。本症例でも卵白を含むエンテルード[®]は注入すると啼泣したため、まもなく中止した。またカレイで明らかな皮膚症状と呼吸器症状が出現した。一方、牛乳蛋白と大豆蛋白を含むエンシュア・リキッド[®]やハーモニックM[®]は数年間摂取し続けた。時々出現していた冷汗、不機嫌、嘔吐などが、経腸栄養剤による食物アレルギーの症状であったと仮定して、その症状が一過性であった機序は不明である。ミルクIgEは陰性で、大豆IgEはクラス2と弱陽性であった

ため、何らかの因子が加わった時のみ大豆アレルギーが出現した可能性がある。感染症などに伴う消化不良が一時的にのみ影響したのかもしれない。一般的にも即時型食物アレルギーの原因食物として大豆はまれであり⁶⁾、大豆アレルギーでは症状が現れにくいことも一因として考えられる。あるいは、大豆抗原と大豆IgEが結合して肥満細胞が脱顆粒した後しばらくの間、その反応性が低下したために、経腸栄養剤を再開しても症状が出現しなかった可能性もある。

重症心身障害児においては食物アレルギーが見逃されやすい。食物摂取時や経腸栄養剤注入時に、嘔吐、下痢、喘鳴、不機嫌、皮膚色蒼白などがみられた時には、食物アレルギーの症状である可能性も考えて、積極的に卵白、牛乳、小麦、大豆などの食物アレルゲンの検索を行うことの必要性を痛感させられた。

本論文の要旨は第42回日本小児アレルギー学会にて発表した。

文 献

- 1) 安田和正, 平野京子. 魚によるアレルギー性食餌性蕁麻疹の1例。(2)白身魚と赤身魚との共通抗原性と抗原活性の比較検討. アレルギー 1985; 34: 1081-1086.
- 2) 伊藤浩明, 菊池 哲, 山田政功, 他. 小児アレルギー疾患における新規吸入性・食餌性アレルゲンCAP-RASTの検討. 小児科臨床 1994; 47: 815-824.
- 3) 松本 勉, 網戸公美, 坂本泰寿, 他. 魚介類, 穀類, 野菜, 果物におけるCAP RASTの有用性の検討—CAP RASTの結果とSPTを中心に—. 小児科臨床 1994; 47: 825-832.
- 4) 田中竜太, 市川邦男, 浜野建三. クラスタ分析による魚介類アレルギーにおける共通アレルゲン性の検討. アレルギー 2000; 49: 479-486.
- 5) Sampson HA, Ho DG. Relationship between food-specific IgE concentration and the risk of positive food challenges in children and adolescents. J Allergy Clin Immunol 1997; 100: 444-451.
- 6) 今井孝成, 飯倉洋治. 即時型食物アレルギー—食物摂取後60分以内に症状が出現し, かつ医療

機関を受診した症例 — 第一報 —. アレルギー 2003 ; 52 : 1006-1013.

[Summary]

A 10-year-old boy with severe mental and motor retardation developed flushing of the skin and dyspnea when eating flatfish, so he was suspected of having a food allergy. A blood examination revealed high levels of IgE not only for flatfish but also for many other foods, including egg white and soybean. Since vomiting, bad temper and cold sweats developed dur-

ing the injection of nutritional supplements including egg white and soybean through a gastric tube, they might have been symptoms of food allergy. Children with severe retardation cannot complain of an itch or scratch their skin, even when they feel an itch. Food allergy should not be overlooked in severely retarded children.

[key words]

severely retarded child, food allergy.